Journal of Tama Clinical Psychology
No. 8 2014 p.41-56

講演録

心の糧としての子どもの時代

村瀬嘉代子 北翔大学

現代の社会において、子育てには様々な課題があり、それに対する色々な対応もよく論じられております。 私は、どんな状況にありましても、少しでも生きる希望を見つけていくことが大切だと思っております。非常に難しい困難な状況であっても、よくよく事態を観察して、小さな事に気が付くようなセンスを持ち、それを手がかりに考え抜いて、どうしたら良いかという事を色々、方略を考えますと、道は開けていくのではないかという事を、これまで色々な領域で仕事をして参りまして思うようになってきました。

そこで、今日は、少し終わりの所は希望が持てるようなお話をしようと思います。これまで私は、どちらかというと、聴覚に障害がある上に精神疾患を病んでいらしたり、発達障害を抱えていらしたり、複数の障害を併せ持つような、そして経済的にも大変苦労されている方々とか、多くの方が関心を寄せられないような、世の中で、人の苦労を一手に担っているような方に出会ってまいりました。その際に、どうしようかと思うような時でも、何か道は開けてくるように思いましたので、そのような話を最後にと思っているわけでございますけれども、始めの所は概略、子どもが育っていく時の基盤である家族や社会というものが、現代においてどんな意味を持っているのかという事をお話ししようかと思います。

今回、どうして「心の糧としての子どもの時代」という題をつけたかをお話しいたしましょう。

今から 15 年程前ですが、私は縁あって聴覚に障害を持っていらっしゃる高齢者の施設と関わることがありました。そこは本当に世間から忘れられたような所で、就学もできず手話もご存知ない、もちろん読み書きもご存知なくて、その人独自の身振りでやりとりされるという、本当に社会の底辺を生きてきた方々の施設でした。そこの施設長さんから、「皆やっぱり人なんだから、この人たちが興奮しているときに薬で眠らせるというような対応ではなくて、少しでも人らしい生きている喜びが味わえるような関わりをして欲しい。」との依頼がございました。私はお話しをいただきその現実の厳しさを知ってそこに伺ってみますと、そういう方お一人お一人が、身振りとか、唇を見て相手の言うことを読み取ろうとされています。それから自分では聞こえないけれども声を出すという練習を、ろうそくの火を消すというような事で音を出す訓練をして、自分では聞こえないけれども、話すということを身に着けようとされています。

そのような方お一人お一人に、どうしたら少しでも気持ちが通じるのだろうかということを考えて関わっていく中で、気持ちがふさぎ、中には混乱してらして生きる希望を失っていらっしゃる方が多いのですけれど、そういう方々とお話ししている時に、子ども時代の、本当に小さな思い出が語られることが多くありました。たとえばお母さんが作って下すったおはぎの味を今、急に思い出したとか、家が貧しくて修学旅行にいけないと思っていたら、収入もそんな多くはない若い先生が運動靴を買って下すったので修学旅行にもカツ

カツの費用で行けたとか、そういう本当に小さな、もう苦労がいっぱいあった中での子ども時代の本当に小さなひとつの思い出が語られます。

小さな子ども時代に、自分が人から大切にされ自分なりに人として心をかけられたという経験を思い出されたことから、それにまつわる事を色々お話ししていると、編み物を 1 つの目から編んで段々大きなセーターとかが出来上がってくるように、そのように大きく気持ちが変わっていくことを経験いたしました。

同じような経験が精神科病院でもございました。とても重い人格障害の方々がずっと長く入院していておられまして、職員の方があまりにも対応が大変で辞めてしまうほどの粗暴な方々でした。そういう人達が少し落ち着くようにと私が面接を始めたのですが、そうしたら本当にハードで、どうしようかと思いました。ですけど、そういう“自分は世の中から疎まれ何もいいことがなかった”と思っている方々と接していて、よく素直な気持ちで何か相手がこちらに向けて来られるものを聴いていますと、小さな事でも何か 1 つの子ども時代の思い出が、それが実は人が蘇っていく大事な手がかりになるのだという事を多く経験いたしました。

また別の高齢者の施設で改めて考えさせられましたのは、年を取ってから懐かしく思い出して元気を取り戻されるのが、ご自分のお父さんとかお母さん、殊にお母さんのことですね。90 歳を過ぎた方が、「お母さんが生きていらしたら」とおっしゃるんです。

「そんなことありえない」とお考えになるかと思いますけれども、実は、人が一生生きていくための基底をなすものは、子ども時代というのが非常に大きな意味を持っているのだと言うことを、私は強く思っています。理論から考えるのと又もう一つ別の、" 本当に切実な色々なものを失ったような状況の中にある方が、自分の子ども時代をもう一度見直すことによって自分の「生」と言うものを受け止めることができる " という事実を大事にしたいと考えているのです。

その意味で実は、子育てとは本当に大切で、その人が一生に生きていくための、長い旅行に行くための大事なお弁当を持つようなことが私は子育ての時に子どもがする経験かな、と思っています。

そういう事を基にいたしまして、人間というのは生まれるときに自分にまつわる基本的要因、どんな身体的状況をもっているか、どういう人を親にして、どんな家族の一員として、国籍は何で、ということは何一つ選ぶことはできません。中には本当に幸せな条件をいっぱい持って生まれてくる人もいますけど、なんで一人の人にこの人はこんなに不幸なことが沢山、沢山不幸を担わなければならないか、と感じるような人生って不条理な面がありますよね。でも、この不条理でも誰かが変わって生きてあげることはできない訳です。ただその時に本当は親が、最初に赤ちゃんが生まれた時に子どもに向けるものですけれど、現在それが親から受けられない、虐待されてそういうものを得られなかった人が少なからず居られますけど、他人であっても「あなたは無条件に存在されている意味がある」「貴重なあなただ」とそういうことを心から思ってくれる人に出会うと、そこから人は自分の物語を始めていくことができるのです。

かつてベストセラーを書かれた乙武洋匡さんと言う方がいらっしゃいます。あの方はひと月くらい生まれてからずっと入院されていて、お母様は赤ちゃんに会わせてもらえなかったんですね。ようやく退院することになって、それで家に帰るのだしというので赤ちゃんをこれがあなたのお子さんだと会わせた時、見るなりそのお母様は「まあ、私の赤ちゃんはだるまさんみたいになんて可愛いんでしょう」っておっしゃったそうです。とてもほがらかで天真爛漫な物事をポジティブにお

取りになる方だったと言うことですけれども、第一声がそれであったという事を聞いて、自分はとても救われて、だから何も自分のこの条件について色々思ったことはない、とご著書の中に書いてらっしゃいます。

けれども、私たちは色々な場面で子どもに対して条件をいっぱいつけますね。これをやったら、おりこうさん、これ頑張ったらえらいわねって。ずっと“そのままでいい”という訳ではありませんけれども、でも一度は素直に、「それはあなたのそうせざるを得なかった必然で今はそうなのよね」って本当に素直に思う事ができるかどうか、私はその事が実は子どもが育っていく時に出会う大人に問われていることなのだと思っています。

自分に問うこと、自分がどんな人間かどういうふうに生きているか、結局子育てというのは自問することだって思うのです。そういう意味でなにげない日々の営み、日常生活の中で、無意識的に振る舞っている行動の中から、実は子どもは自分の側にいる大人がどんな事を考え、どんな人なのか自分にどういう気持ちでいるのかという事をそこから汲み取っているので、子育てっていうのは相互関係の中で育ち合うという事なのだと思います。

子どもによって気付かされ育てられ、一緒に育っていくという面が大事な所ですね。それで、どちらかと言いますと、世の中は今、単一の理論や技法をそのまま引用するマニュアルが大流行ですけれど、本当は人というのは他ならない私、私に合わせたお洋服で言えば、オーダーメードの服を着たいのだと思います。最近大手服飾店の服は随分色もきれいになって、デザインもしゃれてきましたけど、でも何か皆同じようで。それが大好きで仕方がないっていうことはないのでしょう。服でさえそうなんですから、まして自分が人として生きていく時に自分に出会う人、自分の何か他ならない自分をしっかり見つめてくれるような人に出会って、それで育っていける。子育ての基本は、私は人の中にひそんでいるその人自身がうまく見つかって、生かされる、そういう可能性に気付くセンスを持つことなのだと思います。

個別的に関わるというのは大変なのですけれども、人間の長い歴史で今ほど、あらゆる場面で画一化とか制度化が進んだ時代はないと思うのですけれど、だからこそそれの反対で一人一人の事を丁寧に考えるというのは、オリジナリティがあって楽しいと思いませんか。これを、子育てって難しいと思って負担だと思うのか、考える種があって退屈しなくて、やってみて違ったと思ったらまた少し人に聞いたり考えたりして、もっと良い方法を考えていこうと思えるか。私は物事の捉え方が実は大事ではないかなと思うのです。

それに致しましても、現代の家族の特色というのは非常に変化が激しくてなかなか難しい状況にございます。例えば、1985 年国際家族年というのが設定されましたが、その時のポスターは両親の間に男の子一人、女の子一人のきょうだいがニコニコ笑って、家族四人が幸せそうというつまり、四人家族がスタンダードで幸せだというポスターでした。しかし、ご承知のように今、一家族で子どもの数は１．１人位でしょうか。四人家族がスタンダードではなくなっておりますし、しかもリーマンショック以後成長神話は崩れ、エネルギー問題や地球資源の問題が深刻になってまいりました。それから実態経済と金融経済などという言葉が今から 50 年くらい前は一般の人が知らなかったと思うんですけれど、いささか異常な形で実態経済と金融経済が乖離していて、何か金融経済が見えない形で自己増殖するように世の中を動かしている。それに対して何かこう無力感というものが否めない形であるかと思います。

そして、こんなに急速に少子高齢化が進むと、あまりはっきり予測していなかったんですけれども、近いうちに日本は労働力不足に陥るだろう、そうするとまた経済成長が鈍化するだろう、とい

う風に社会成長の質をどう維持するかという課題に社会が直面していて、漠然とした閉塞感があることは否めないと思いますね。そして、一方これに伴って家族の捉え方にも変容が見られます。皆様は家族と聞かれたら、どんな風にそれを定義なさいますか。

例えば広辞苑では「夫婦の配偶関係や親子、兄弟の血縁関係による結合を基にして成り立つ小集団、社会構成の基礎単位」と書かれていて「なるほどな」と思います。例えば家族社会学の専門書などを読みますと、沢山定義がございますけれども、そこに通底するものを引いて参りますと、関係性を通しての情緒的満足つまり愛情欲求や安らぎを充足する、それから次の世代の育成をしていく、それから生活の保障、生活基盤の共有ということになります。これを先ほどの広辞苑の定義に付け加えると、だいたい家族ってそういうものかなという一応コンセンサスが得られたかに見えます。

ところが、内閣府が発行しております国民生活白書の平成 19 年から 22 年版を見てみますと、家族の捉え方に個人差が見られるのも近年の特徴です。これは社会の価値観の多様化を反映しておりますけど、例えば定型の異性婚以外、つまり同性結婚も家族として認めるのではないかという意見が、わりと公然と語られています。それからこれは皆様ご経験あると思いますけれども、今、クライアントの子どもさんに会うとペットは家族だと真剣に、そしてペットこそ家族だと、兄弟やお母さんなんかよりも本当の気持ちが通じる、という事を言われます。なかなか今は微妙な世の中、移行期にあるのかと思うのですけれども、一方、家族っていうのは失われたり、あるいは何か損なわれたりすると、どんなにそれが自分に大事なものだったかという事に気が付きます。普通に生活している時にはあまり有難みがわかりませんし、むしろ色々心配してくれる親をうっとおしく思ったりします。そういう家族の機能が今、色々な形で社会に代行される形になっておりますけれども先程の定義でも申しました、経済基盤を共有するとか生きていく上での社会保障的な意味もあるとか、そういうのがだんだん家族の役割から他に移行するとしまして、残るものは愛情欲求、人間の絆です。

この愛情欲求とか、絆は非常に貴重なものでして、例えばもう一つ家族の特徴を考えてみますと、沢山ある人間関係の中で、多くの社会的な関係は合意的な関係です。例えば、この人にお金を貸すということは、この人に返済能力があるからであり、この人を雇用するというのは、ここに期待されている役割を果たすだけの力があるからという、そういう関係ですけど、本来家族、親子というのは非合理である、だからこそかけがえなのない貴重なものです。結婚式の時に、「病める時も貧しき時も汝変わらぬ‥」とかで「はい」と言われますけれど、でも人間ってもろい所がありまして、金の切れ目が縁の切れ目という諺も事実であり、だからそこを何とか修復しながら生きようとする所もあるわけです。とにかく何故家族が他の関係と違い、人間の一番の拠り所の基盤となるかというと、そうした損得を抜きにして、本当に見返りを期待しないで相手の事を大切に思う、そういう関係が家族の特質であり本来の家族です。でも、なかなか、人はそういう風にいけない。その為に色々臨床活動で少しお役に立てるような働きをするわけでございますけれども、もう一方、家族の生活というのは実は難しい特質を持っている。

家族の生活には、矛盾した要素をどうやってバランスよくもっていくか、これは本当に生きる知恵ですけど、それが求められています。例えば、家族だから甘えていいという思いは、家族の関係のなかでおこりますが、でもめちゃくちゃにただ甘えて良いのではなくて、家族の生活のなかにこそ、教育の原点があり、人間としてのしつけをしなくてはならない。だから、これをバランスよく

するのは、本当にいい意味での聡明さというか、生きた知恵がいるのですね。そして、家族だから、親近感があり、人間的なつながりが持てる、またそれを大切にしたいのですけれど、だからと言って、家族だからといって、まるで家族のメンバーのことを虫かごにいれた虫を観察するように、前後左右、縦横斜めとか観て、透明人間か機械かのように、「うちの子は、何を考えていて、机の中にこんなものをもって」とずっと観ていることが良いのでしょうか。本当は、小さい時は、多くを養育する大人が、子どものことを理解しても、だんだん適切に距離をとって、その人を信じてお互いが別個の人間だと距離を上手にとって伸ばしていくのが、育児ですね。これをいつ頃からどんな風に距離をとっていくか、これもなかなか難しいところです。子どもが学校に行っている間に、机の中を家捜しするのは、熱心な親でしょうか。だからと言って、知らない間に万引きしてきたものがいっぱい部屋に溜めてあるのを知らなかった、というのは問題でしょう。つまり、子どもをよく知らなければならないのですけれど、でも人格を認めて、その子に委ねるということを相手の発達の状態においてでどうやって考えていくかが大切になります。なかなか難しい、矛盾した点です。

そして、当然家族には、父なるもの、母なるもの、あるいは兄弟のなか、それぞれの役割があり、役割があってその人らしい独自性があるわけです。互換性ということもあります。例えば、お母さんが急に病気になられたら、お父さんが、あるいは子どもがお母さんの役割をある程度とれるという互換性も大事ですね。でも、互換性を大事にして、みんなのっぺらぼうで、すごく女性的なお父さんがいいのか、いつも強面のお母さんがいいのかっていうと、ここはなかなか難しい。つまり家族の生活をバランスよく行うということは、本当の生きていく知恵が問われる。私は、これは、やっぱり試行錯誤しながら暮らしの中でだんだん練れていくものであって、あまり最初からうまくいかないと失望するよりは、そもそもこういう二律背反、矛盾したものをどうやってバランスをもって生きていくか、これが、生きていく知恵であり、試行錯誤していくことが、生きることだと思って、学校のテストみたいに一喜一憂しないことも大事ではないかなと思います。

先ほどから申し上げましたように、40 年間の間に、家族なき家族の時代と言われたり、人の家族観というのは変わってきており、また、実際の家族の生活もずいぶん関係が薄くなったりしております。これは、主として家族を営んでるのは、大人なんですね。そこで私は、次の世代を担っていく子ども達が、いったい家族ってものをどう考えていくか、大人になってどんな家庭を、どんな家族を持ちたいか、どんな大人になりたいか、壮年期の大人が評論家的にいろいろ言うだけじゃなくて、子どもの気持ちを素直に聞いてみてそれを踏まえて、大人が子どもに接するときの自分のあり方を考える基にすることが必要ではないかと考えたのです。

1982 ～ 3 年頃ですが、羊のドーリーというのが生まれて、これからクローンという技術によって、これから人間もクローンで生まれるっていうニュースが世界中を駆け巡りました。その時期に、家族法の学会で「近代家族のゆくえ」というシンポジウムがございました。そこで私は、臨床心理学の立場から、人間にとって家族がどういう意味をもっているのか、これから法律上どういうことが言えるのか、ということを話しました。その時、非常に最新のお考えを持っていらっしゃる法学者は、同性結婚を認めるべきだとか、あるいはフェミニズムの先生は、これからは 10 ヶ月も子どもを体内に宿して、しかも、産んだ後女性だけがたくさん負担を背負うというよなことはだんだん止めにして、子どもをもっと技術的に…クローンも生まれたことだし、というような本当に SF のようなお話をされました。

私は、人は家族が傷ついたり、失ったりした時に、どんなに大事か初めて気がつくと言いましたけれど、実際の臨床経験を通して、家族関係に恵まれない人、親子のしっくりいかない人、なかには、自分が誰だかわからないで気がついたら世の中に１人おかれていた人、そういう人に会ってきて、人間にとってどれほど家族というものが、意味があるかということを痛切に思っていましたので、皆さん最新の領域の理論に基づいてお話しされたのですけれど、聞きようによっては時代遅れの雰囲気の話になりました。これは私の臨床経験からそうとしか考えられず、そういう話をしたのですが、先程申した通り、子どもが何を望んでいるか、子どもの気持ちを虚心に聞いて、大人は自分のあり方を考えるべきではないか、と思って調査をしてみました。

これを話すのは目的ではございませんので駆け足で申し上げます。お子さんにＡ３位の大きさの紙に、子どもが描いたようなわざと雑な絵を描いて日常生活の 10 の場面を示します。そして「これはどんな所、お話を作って」と言うと、子どもはこの絵にそったお話を作ります。そうして、自然にその中にお父さんの枠とお母さんの枠が出てきて、その子が父なるもの、母なるものにどんなイメージを持っているかが現れるだろう、それがその子の気持ちを表しているだろう、と考えました。これを小学校３年生、５年生、中学生、高校生の人達に行ったのですが、アンケート用紙を配るのではなく、なるべく自然な状況で子どもがここで話したいというところで調査を行いました。例えばピアノの下にもぐってとか、保育園の子どもはここがいいって私の膝の上に座ってとか、それから、人と距離をとって今、とても傷ついているというような中学生はここがいいと言って、日の当たらない校舎の北のじめじめした人の来ない所に行ってここで落ち着いて話したいという、普通の調査研究とは異質ですが、私はなるべく自然な形で、しかもいかにも質問を順番に聞くのではなくて、運動だったら何が好き？とか趣味は何？とか色んな中から自然に質問を織り込めるようにして聞いていったものです。

どのようなグループに聞いたかというと、まず①群は、家族と一緒に住んでいる保育園のお子さん②群は家族と一緒に住んでいる公立の小学生の子ども達、中学生、高校生です。で、それが 1990 年時。そして③群は同じ中学・小学校の 2000 年時、つまり時代の変化の中で実際子ども達は親に対するイメージ、家族に対するイメージが違っているか、というフォローアップ調査を致しました。一人一人面接して。それから④群は虐待されたり、親御さんがなんらかの事情で子どもを養育できない、そういう社会的養護児童施設の子どもさんです。それから⑤群は「ひきこもり」とか「精神疾患」あるいは「非行」で社会に居場所を失っていて通所しながら、そこでどうやって世の中に復帰していこうかという、そこの人生のすごろくで言うと、少し壁に当たっているような人達です。それから⑥群は、血液疾患、慢性腎臓疾患で小児病棟に入院中の子ども達で、この子ども達は家族と一緒に暮らした時間のトータルよりも入院期間が長いという子ども達です。この子たちには、その家庭の事情を聞くというのではなくて、こういうような家族の生活が望ましい、それからお父さんとはこういうものだ、お母さんはこういうものだ、自分が大人になったらこんな家庭を持ちたいという、つまりイメージを尋ねました。

その結果なんですけど、10 年前とはつまり 1990 年代なんですけれども、細かくはお話ししませんが、私がこの調査をした一つの副産物で改めてびっくりした事は、授業崩壊と言われるくらい騒いでいる公立の小学生中学生、それに高等学校は公立の中堅の所とトップクラスの受験の所とそれから、６割の子どもさんが単身家庭、あるいは家族がないという定時制の高校生、と世の中のサンプルのような高校生に聞いたのですけれど

も、どの年齢の人達もそれから、保育園児の幼児さん達も自分の話を素直に聴いてもらうということをものすごく求めているのにびっくりしました。

教室ではガヤガヤ騒いでいて、おしゃべりを沢山しているようなんですけれども、一人の子どもさんにこういう話を素直に聴くと、帰ってから子ども同士であれはとても面白かった、良かったと言って是非やった方がいいということになって、最初に予定していた人数よりも希望者が増えていきました。意外に真剣に自分の事やそれから大人になった時の事を子ども達は考えている事にびっくり致しました。ただ先程申しました、社会的養護児童というのは大人になる事が怖い、どんな大人になったら良いのか分からない、どういう人を「こういう人ならいいな」と考えたら良いのか分からない、そういう意味での傷つきがとても大きくて、家族と一緒に暮らしている子ども達は年齢、全部ひっくるめまして、基本的にどんな大人になりたいか、どんな家族を持ちたいかというのは、やはり自分の父や母を基にしているのですけれども、養護施設の子ども達は当然ながら施設の先生、職員の方をサンプルにしていました。

要約して申しますと、評論家レベルで色々言われるのと違って、子ども達というのはこの 10 年の間隔をおいたフォローアップ調査を両方併せてみましても、本質的に保守的で、実際の子ども達の生活とそれが必ずしも一致しているわけではないのですね。父なるものと母なるものとの特性を分けていて、つまり、望ましい家庭というのはお父さんとお母さんが車の両輪のように協力し合って、お父さんは家族の生活の大きな事を決める、みんなをリーダーとして引っ張っていく、そして細かな気遣いをして心身の傷を受けたり、病気になったり怪我をして大変な時に心配りをしたり、あるいは家族が仲良くなるような配慮をして家をまとめていくのがお母さんである。

実際の生活はそうではなくても、子ども達が意外にそういうイメージを持っているという事に改めて考えさせられました。そして、殊に家族と生活する時間が短い小児病棟の子ども達は、もし、私が大人になるまで生き延びる事ができたら家族の生活を大事にしたい、そしてお父さんやお母さんを沢山心配させたから、少しでもお手伝いしたいという事を、非常に重い疾患を患っている子ども達は真剣な顔で話してくれました。そして、こういう話を大人の方から聞き出そうとするのではなくて、素直に聴くことが大事だって言われました。

また、本当にガヤガヤ騒いでいる小学生や中学生が遊び時間に駆け寄ってきて、「来年もまた来るんですか」って言うので、「いえいえ、今年一回なのよ」って答えると、「来年も年度の始めに来るといいと思います。僕はこの面接をしてから考え深くなりました」って。「あれから自分について考えるようになりました。毎年、新学期の始めにこれをすると皆、考え深くなります」と、本当にこれは別に選ばれた特別な学校の子どもではなくて、都内のむしろ社会の縮図のような地域の公立の子ども達が、いろんな話をとても真剣にするので、びっくりして、やはり「いろんな事考えているねぇ、でも普段からあなたたち、がやがやいっぱいお話しして、友だちやおうちでもお話しするんでしょう？」と言うと、「いえ、こんな話をしたのは、初めてです」ということでした。声をだして、がやがやとは話をしていますが、自分の考えていることを相手に伝えて相手が真剣に聞いていることが、また自分に響いて自分の考えを掘り下げるというそういうやりとりの中で、引き合う、深め合うというそういうことが、実は、普段の生活で非常に少なくなっているらしいということが、この調査の副産物でわかりました。

これには胸が痛んだのですけど、でも逆に、それを渇望している子ども達がいるということで、私は、あの子どもの中に表面は、がさがさざわざ

わしていても、ちゃんと健康なものが息づいているということを知って、とても心強く思ったものでした。

子ども時代というのは、冒頭から申しておりますけれども、やっぱり人間が形成されいく基本点、しかもいかにも子どもだからというように、何かオツムテンテンというような赤ん坊をあやすような関わりだけじゃなくて、幼児であっても人格があるというような気持ちで、しっかり向き合う大人に出会うことが、健康な人に育っていく時に、とても大事だということなのです。

先ほどの調査のフォローアップなのですけれど、初めて 20 年目ですけれども、もう大規模にはできませんでしたが、グループホームの子どもたちの様子を調べました。この 20 年の間に、社会的養護児童、家庭的恵まれなかった子ども達には、なるべく家庭に近いような、グループホームを増やすことを厚労省は推奨されています。子どもは 6 人でそこに 3 人のケアワーカーの方が、交代で家族になるべく近い形で養育していく形です。あるいはユニット制で 10 人ぐらいのユニットを作って、そういう建物の中のしつらえは、3 LDK みたいにして、なるべく家庭に近い形で、三食のご飯もただ食堂の窓のところから決まったものが出てくるのではなくて、買い物して、調理して、なるべくきめ細やかな個別化した対応をとるようになって来ています。

そういうなかでグループホームの子ども達に、先ほどの調査の絵を見せてお話をつくってもらいました。1990 年当時の養護されている子どもさんは、別に知的には普通域なのに、親子のクマの絵をみても、「何かしら？かばかしら？何かしら？」とか、誰一人、パパとかママとかお母さんグマとか言えなかったのです。本当に、自分の中に求めているものが、直撃されると、却って人は混乱する状態だなと思ったので、無理にお話を作ってもらうというのがとても過酷なことだと思って、その時はやめて、子どもと他の自由な遊びをしたんですけれども。次第に養育の形態が整って、内容が充実して参りました 2012 年では、同じような社会的養護児童でも、この絵カードを見ると、家庭で育っていて望ましいお話を作る子どもとほとんど似たような、あのお母さんクマとこどもクマが、生き生きとしたやりとりをしている。それから、例えばこの頭を冷やしている子グマにお母さんクマが心配して、何度も何度もタオルを変えているなんていう話を、これを世話をしてもらっている担当のケアワーカーの膝にすわって、首に手を回しながらお話しする。

ですから、基本は親子の中で養育というものはなされますけれど、質のいいきめ細やかな、その子の状態をきちんととらえたやりとりをする中で、基本的に大事な情緒や思考、つまり、人の育ちは可能だということを、改めて示されていると思ったわけでございます。

それで、先ほどの⑤群ですね。引きこもっていて、精神疾患があったり非行があったりとまあなかなか大変な経験をしてきた人たちが、それでも社会に居場所を見つけてその人らしい生き方がある程度軌道に乗っているというような人たちに、いったいどういう大人に出会いたいか？それから、どういう支援者、どういう教育者に出会いたいか？ということを聞いてみました。すると、「まず、さりげないしかし、自分の存在を肯定してくれるようなまなざしで、いかにも何かというよりも、例えば、施設の中で、『この頃言葉数が少ないように思うんだけど、なにか心配があるのかしら？』と、見てないようでちゃんと自分のことをそっと気がついてくれたんだなぁというそういう自分は、誰かも忘れられているじゃないということが、ふと感じられて安心する、そういうまなざしを感じた時」。それから、「決めつけないで聞き入ってくれる、自分勝手なことを言いつのっていても、ひとまずは大事に聞いてくれるひと」。そ

して、「座っていて言葉だけでいろんなことを言うんじゃなくて、一緒に行動してくれる人」「見守って、試行錯誤するのを許してくれて、つまり時熟、物事にはある時機がいるということを知っていて、早く早くとやたらにせかさない人。」「でも、せかさないというのは、しかたないというふうにほっておくんじゃない」ということを言われました。そして、「正しいことを正しくだけの大人は不十分で、ユーモアのセンスやほどよい滑稽観があること」というような答えが返ってきました。

これは、なかなか一生懸命なっているときは、ゆとりがなくなって大人はついこういうものを失ってしまいますけれども。そして、たいていの大人は、何か生きていく上での課題にぶつかると、こうしたらいいということ一つの例を提示してそれを勧めるけど、本当は生きる上での問題は、いろんな解決の道が違う。少なくても、一つの問題に三つ以上の答えを思いつくような大人であってほしい。これは、本当に生きた知識と教養がないと、だめなのでございますね。貼ってすぐきく湿布薬のようにはいかないということを、こういう大人を求めていることをこの人たちは、教えてくれました。

ここも大事なことですけれども、実際の親子関係というのは、いろんな意味で、やっぱり本来の親としての役割や、親としての気持ちを持つことが非常に難しいことがあります。でも、そういう時に第三者があきらめなさいとか、ああいう親だから仕方がないという言い方でなくて、人は、誰しも心の底に自分の親を許して和解したいという気持ちを持っている、それを忘れないことがとっても大事だと思うのです。実際の自分の家庭はだめでも、でもいつか親の事を許せたらなという言葉をこれまで多く聞きました。

夏休みとかお正月休みに、多くの施設の子どもさんは、いろんな伝手で一泊とか遊びに行く先があるんですけれど、それが全くなくて、ずっと施設に残っている子どもさんがいるという事を知り、私は平成２年ぐらいから年に数回ですけれど、自宅に本当に短い時間ですけれど、その子たちを招くということをしてきました。どんなことをするかは、それは、子どもさんの年齢や何が課題になっているかで違うんのです。例えば、いつも決まった調理されたものが出てくるので、こんなものを食べてみたい、材料をそろえて、どんな手順で作るのかをやってみたいという時は、お料理なんかしたり、美術館に行ったりいろんなことをするのです。あるとき部屋の隅で、がま口を逆さまにして小銭を一生懸命勘定している小学生の男の子がいて、「どうしたの？帰りの電車賃とか、おこずかいだったら、おばさんは少し考えてあげるから、今そんなお金を一生懸命計算しなくても大丈夫よ。」と言ったら、「そうじゃない、明後日お父さんの誕生日だから、何かプレゼントしたい、マグカップぐらい買えるかなって小銭を数えていた」と。その子のお父さんは、いつか引き取ってあげる、引き取ってあげると言っては、次々お相手が変わって全然子どもを引き取る気持ちのない人でした。

でも、子どもは、そのお父さんにお財布を逆さまにした小銭を数えて、プレゼントを買いたいと思うわけです。また、学校の給食で生き延びて、土曜日は本当に水を飲んでいて学校の給食の残飯を食べているところから、学校の先生が虐待されているということを気づかれて、それで施設に送致されたという子どもさんですが、家に来て私と何かを一緒に調理をしていて、「おばさん、なんでもお料理とかお菓子とか作るの上手ね。でもね、私のお母さんも上手なのよ、私のお母さんもいっぱい作ってくれた」って言うのです。それは、全くありえなかったことであり、それは、やっぱり心の底で、親と和解したい、受け入れたいって思っているのだと思いました。

なぜと考えてみると、今日初めから申しました

とおり、生物学的に自分というものを規定しているのは、つまり父と母ですね。それから、今は科学的に証明されておりますけれど、関係の元とは、胎内にあるときから胎児とお母さんは関係があるというのが、超音波を見るとわかります。お母さんが、聞いてらっしゃる音楽が、きれいなメロディーだと、胎児の動きはなんかなめらかで、行進曲みたいのだと、胎児が、ちょっとリズミカルに動いているとか、まあ胎児も色々だと思うのですけれど。ですから、自分の存在を規定している元のものを否定したら、どんな人間になったらいいか、難しいですよね。土台があって、その上にそれからだんだん人生が広がっていくなかで、出会う先生やお友達や知人によってさらにモデルが増えていって、こうなりたいという自分の理想像が、よりいいものにふくらんでいくわけです。しかし、土台の親を、そんな親をあきらめなさいって第三者から言われたら、すごく基底が揺らぐわけです。私たちは、このことを人を支援する時に決して忘れてはならないでしょう。だからと言って、あんたの親がそうとしかできないのは、すごくつらい生い立ちの人だからわかってあげてね、などと言うことを本人のペースに先んじてこちらが言うことは、もちろん論外ですけれども。

この人たちは、いつかは親を許せたらなぁと言っていました。だから、やっぱり、この子どもの成長が、どれくらいか、精神的にどれくらいか、身体的にどれくらいかひとりひとりよくわかっていて、今日のその子の受け皿はどれくらいかということに合わせて、大人は、色々ものを言ったり、働きかけたりすることが大切になります。生きたアセスメントとは、このことだと思います。

最後に、駆け足になると思いますけれど、何度もいうように家族、親が一番ですけれども、それに代わるいろんな他者が、それぞれの立場でチームワークで輪をつくって支えていくことによって、過酷な状況からでも人の精神は再生し、育ち直りが可能だということをつぶさに教えられたある経験をそのままお話したいと思います。

ある就学指導委員会でのことです。次のような問題として登場しました。

小学校６年のＡ君は、校内ではいじめに合っているけれども、表情も変えずにされるがままで、無抵抗である。両親は全く養育力が不足で、小学校一年から一度も保護者会に出席したことがない。家庭訪問をすると、それを見計らったがごとく、外出していることが多くなかなか会うことができない。それで、Ａ君は、普段から言葉もほとんど発せず、表情も変わらず、いじめられても反応しない。

このような状況で、自閉症ではないかと思われていました。

成績はクラスで最下位というのに、ちょっと矛盾していると思われる点が、非行集団、都内のデパートをあちこち出かけて万引きをしている集団の見張り役をしているというのです。これはちょっと矛盾していますでしょ？そして成績は最下位ですが器用で、電線のくずや板切れなんかを拾って、そして廃物利用の工作を独りでやっている。

それでも全体に非常に遅れていて情緒的にも問題が多くあるので、中学進学を機に「彼は施設に入所することが適当である」と言うような意見が付されていていました。２才年下の弟も同じような道を辿っていると言うことも書面にありました。

この子たちのご両親は、ある教会の附属の寮の管理人をして居られるのですけども、管理人としての仕事を殆ど全うにできていないとのこと。お父さんは帳付けがしっかりできないことや、手紙が来ても寮にいる人にきちんと渡せなかったりするので字もちゃんと読めないんではないか？お母さんは夕食を寮の人のために作る仕事なんだけれど、調理がちゃんとできなくて、キャベツだけ入っ

たシュウマイが出てくるとか。お金の管理が適当で人の言うままに高い物を買ってしまうように経理のセンスもない。両親は仕事がちゃんできないので子ども達二人はこの際、障害児の施設に入り、親は大人の知的障害者の施設に入る事にして、この雇用関係を解消したいという事が雇い主から言われておりました。これは大変な事だなと思ったわけです。

実は、両親は、父親は４歳時に天涯孤独、母親は生後３ヶ月時に置き去りにというような背景の人達ということなんですね。

そこでまず、とても子どもさんが自然な気持ちで自分を表現する、信頼できる同僚にＡくんの面接と知能検査をお願いしました。同僚曰く、「不思議です、あの子は成績が最下位であるというのに知能検査にぽつぽつと反応し、IQ80 位ありました。ひょっとしたらもっとあるかもしれない。でも不思議なのは、問う事には返事をするのですけれども微妙にお父さん、お母さん、家という単語に返答します、あの子にとっては父とか母、家、家族という言葉は何かこだわりがあるようです。成績が最下位というのに、不思議なのは神父様がお部屋のゴミ箱を捨てなさいと、時々用を言い遣うと、外国からの手紙の封筒が捨ててあって、その切手が珍しいので切り抜いてみて、こういう切手を使っているヨーロッパのその国はどんな所かと考えるのが楽しみだという、これが成績が最下位で自閉症でという子どもでしょうか。」

両親には私がお会いする事になっておりました。部屋に入って来られた方は、年齢はちょっとわかりません、40 歳過ぎか、すすけたようなあまり清潔な印象はなく、非常に質素なお召し物を着ておられて、韜晦（トウカイ）という言葉がありますが、あいまいなどういう気持ちかわからない、不思議なおびえたようなでも、うっすら笑っているようなつまり本心を包んでいるような表情をして座られました。

私は率直にどういう役割で今日お会いするということになったか、それから多分雇い主からこれからの事を聞いておられると思うけど、子どもさんのことも含めて色々な立場の人が色々お話しを聞き、あるいは検査の結果を持ち寄って、今後の学校の措置について会議を開く事になっている。私一人の意見で物が決まる訳ではなく、合議により決まるので結果を約束できないけれど、私はあなた方お二人の話を真剣にまじめに大事に聞きます。だから、この時間限られてるけれど正直に素直に、どうぞ遠慮しないで「こうしたい」と言う自分の考えを言って下さい。

だけど、希望を言ったら私がその通り会議でそれを通してあげると言うことはできないので一生懸命聞いた事を正確に伝わるようにはしますけれども、と言いました。

そうすると突然そのご夫婦は二人で向き合ってお互いに手を握りあって双方が目をジーッと見て黙ったまま見つめ合われました。今私が言った台詞は何も苛めてるわけではないですよね。むしろ、きちんとあなた方のご意見を伺いたいと言ったのにどうしてそういう風に固まってしまったのかな、と思ったのですけど。

どれ位でしょうか。少し時間がたってから、「言ってしまおうか」と言われて、ご自分たちの生い立ちを話し始めました。

お母さんは、「自分は本当は誰だかわからなくて山手線の駅にたぶん３ヶ月くらいだろうと言われる赤ちゃんで置かれていたのが私です。それからお父さんは、都内をお母さんと一緒に彷徨っていたのがお母さんが行路病者で道路で亡くなってしまい、それで上野の駅の近くで保護されてその後ずっと養護施設で育ち、お母さんも名前や戸籍は役所で作ってもらってそれで施設で育ちました」ということを言われ、「自分たちは寄る辺もなく本当に寂しかったけど、ここの施設はクリスチャンの施設だったので洗礼名をもらい、寂しい

時は神様を見て、と育ったけどとっても寂しいし、いっぱい施設の畑を作ったり、仕事の手伝いをして勉強なんかする暇がなかった。いつも何か落ち着かなかった。」

お母さんはそういう話をされながら、涙が溢れる非常にガラスのようにもろい、不安定な感じの方でしたけれど。それで「あなた達の意見を遠慮しないで言って下さい」というのは、生まれて初めて聞いた言葉でびっくりしてしまった、施設を出るとき世話をして下さったＦ先生という先生ですけれども、「お前達は身よりがないんだから世の中で小腰をかがめて人から馬鹿にされても抵抗しないで、もうむしろ馬鹿だと思って遠慮しながら生きていきなさい。」と言われて育って、そのつもりでやってきたので、「あなたの意見を言って下さい」と言われたのは本当にびっくりして、だからさっき黙ってしまったのです、という事を言われ、それで本当は自分達も仕事はちゃんと出来ないし、子どももいっぱい問題があるからもう寮の生活は出来ないだろうということはうっすら分かっているけれど、でも家族がない私達だからこそ四人が一緒に暮らしたいんです、と言ってまた泣かれました。

そして、どうして家族が大事かと思うようになったかというと、施設の紹介である問屋さんに勤めた所、お年寄りの大奥様が非常に親代わりに色々な人間としてのふるまい方を教えて下さり、それで施設の先生と一緒に何も身寄りのないあなた達だから結婚しなさいと言ってくれたのです。

お母さん曰く「結婚し子どもが生まれる事について非常に迷ったんですけれど、『夫婦善哉』、（これは「夫婦は良いもので家族は良いもの」だという涙と笑いがある非常に視聴率の高い TV 番組でしたが、）それを観て家族って良いものだな、親子って良いものだな、子どもを育てたい、自分達みたいになんだか、気がついたらポツンと一人じゃなくて子どもを育てたいと思い自信がなかったけど、子どもを持ちました。

そうしたら、そのお年寄りの大奥様が色々教えて下さったのですけれども、大奥様が老衰で亡くなると急に若主人達は自分達を疎んじて、そして自分達の見ていない所でそれまではとても活発で、明るく元気だった兄弟を雇い主がいじめるようになった。でもそれを何か言っても自分達には行き先もないし、小腰を屈めて生きていくようにと言われて自信もなかったし、もう我慢するしかなく、そうすると、子ども達の表情は失せて言葉もなくなり色々な事に意欲がなくなって今の状態になったのです。」という事を涙ながらに言われ、「そして私達のような者が四人で暮らすことは無理なのは分かってはいるけれど、本当は一緒に暮らしたい。」と涙ながらに言われました。これはうんと割愛してお話していますけれど。それで、これは非常に難しい条件ですね、色々な意味で。

でも私は、初めてこの人達が「私達はこう生きたい」という事を表明したものを、それは無理でしょうと言ったら、残る人生ずっと他律で、人間らしい主体性を失ったまま生きていかれるのではないか、おそらくそれは他の施設に行っても子どもも同じ事になるのではないかと思い、「そこでお気持ちは会議で伝えます、だけど、その通り決まるという保証はない。そしてもし家族がこのまま暮らせるようになっても、とても無理だという意見が出ているけれども、色々やりとりして希望が叶った時には、誰かがよくしてくれるのではなくて、今までの自分ではなくて、料理の仕方から帳付けの仕方から人への挨拶の仕方、電話の受取方、色々全部変わる覚悟で変わっていくという覚悟が決まった時に家族の生活は可能になると思う。」と伝えました。

こんな事を、普通に平和な生き方をした私が全くそれを持たないで生きてきた人に言うのは、とても過酷だと胸が痛みながら、でもこれは他律だけでは変わって行く状況にないと思うと言ったんですね。そうすると、二人は涙を流しながら、半

分怖くて、半分希望があると言われました。

正直な、でもこれは事実だろうなと思い、では会議の結果またお話しましょうと言って、別れました。

会議では、だいたい結論は出ていたのに、今の生活を続けその中で変わっていく道を模索しようという事を私と同僚が提案したので、余計な発想だとかなり厳しい意見もありました。 けれども、そういうデータが出てきたという事で、直接その家族の世話をすることは異例だったのですけれども、私村瀬がやるようにという結論になりました。

それでまず、私は状況を知らなくてはと思いまして、その教会の６畳一間に四人暮らしているという所に家庭訪問し、そして雇い主である神父様とお話しようと思って出かけました。行きますと、神父様が最初はもう雇用は無理だとお考えでした。信者の方たちの意見はちょうどフィフティフィフティで、半分は私達のような信仰の厚い者がここにいる家族の世話をしないでどうすると言われ、半分は、こんな仕事のできない人達を雇ってあげてみても駄目、雇用は打ち切りと言う状況で、神父様の判断でどっちにしてもいい、という状況だったんですね。神父様がおっしゃるには、「とても不思議です。今までは部屋の中は足の踏み場のないほど汚れていたのに『あなた方の大事な人がお訪ね下さるよ』と言ったら、わざと私は村瀬先生とは言いませんでしたが誰とも言わなかったのに「ピーン」ときたらしくて、この人達にはこんな能力があるのかと思うくらいに部屋を片付けました。行かれると片付いていますけど、でもいつもあのようにやってると思われたら違います。あれは二日かけて片付けたのです。」半分厳しく、でも半分は緊張をお持ちのような表情でした。

部屋に行くと、本当に古びた部屋ですけどそれなりに片付いていて、ふと見るとカレンダーに〈今日から給食〉とか〈給食終わり〉とか書いてあるんです。夏休みの前になると短縮になって、給食なくなりますよね？６年間一度も保護者会に出席なさらず、家庭訪問も逃げるようにして、なるべく会わないようにしていたというけれど、本当はこのお母さんは子どもの教育を考えていた。どうしたらいいのか、会うのは恥ずかしい、なんと言っていいか分からない、でも何か心配でお母さんなりにちゃんとカレンダーにそういうものを写しているんだな、この人本当は気持ちがあるんだ、でも技が全然ないらしいと思いました。

中学１年のＡ君もいました。小柄で表情のない、本当に弱々しい子で、破れた畳の上に座っていたので「地域の中学に皆と一緒に進学できるって聞いたでしょ？」と訊いたらコクリと頷きました。とにかく、ここから変わっていかなければならない、しかもスピードがいるわけですよね。

それで「今から勉強を頑張ろうと思って、あれもこれもと思うと、みんな目の前に高い壁があるようで大変だと思う、だから手につくとこからやっていったら、だんだんその勢いで他の事もできるから、まず皆、中学生は英語を始めからするから、まず英語を一生懸命やろう。日本人で非常にインテリの人でも英会話はネイティブの人の英語よりも出来ない位の場合が少なくない、怖い事はない。」これはもう元気付ける為に自分でもオーバーな事を言って恥ずかしかったのですけれど、「だから英語からやっていけば皆と同じスタートだから決して引け目ばっかりを持つことはないのよ。」と言って、私は景気づけにアルファベットの歌を歌ったんです。そうしたらなんと彼は小さな声でハミングしたんです、「ああ、この子は何も聞いていないようだけど、変わっていこうとしているのかなあ。」と思いました。

それで、希望が出てきたと思い、とても厳しい事だけれどもう一つ、万引団に入っているという事、これは実は防犯係の方から指導があって、このグループが解体する働きかけがなされていまし

たけれども、でも私は自分がそういう行動をしないという、自分の気持ちを決めなければ周りからだけで良い方向へ行くのは無理だと思い、過酷だと思ったんですけど、「今、あなた英語の歌を歌ってやる気があるわね。じゃ、とっても辛い事かもしれないけどあなたは本当は万引団の見張りをしていると聞いたんだけれど、それをきっぱり辞める事。多分君はとてもおとなしくて言いなりになっていて、それを断ると、ちょっとボコボコにされるかもしれない。だけど命に関わるとか一生治らないというほどひどい怪我は多分させないと思う、ちょっとボコボコになるくらい。」もうこれを言いながら、本当に自分は人でなしだと胸が痛みましたけど、やっぱりある種のきちんとしたけじめ、そこで本人の本当の自尊心が生まれると思ったので、「ここで自分の言葉で『もうやらない』って言う勇気が持てると良いんだけれど、それで大抵大きな犯罪をする人は物心ついてそうなろうと思う人は、多分一人もいなかったと思う。けれど、色々な生きていく分かれ目で、ちょっとずつちょっとずつ反対の道に入ってだんだん最後は大きな事件を起こすようになってしまっている。君は今大事な分かれ道にいて、今、大変でも気持ちを決めたら、こっちの変な方に行かない、もしそっちに行ってしまったら私がまた会えるということは分からないし、もしそういう運命を知って訪ねて行くとしても、せいぜい差し入れの弁当を入れに行くくらいしか出来ない。」と、すごい事だと思ったんですけど言うと、彼はもう、しゅーんとこう小さくなって、頭をこう下げて、黙って俯いてしまったので、「やっぱりこんな事言って厳しかったかな。だけど他律だけではこの状況から変わっていくのは非常に大変だし。私もがんばろう。」と思っていて、それで、でも可哀相だなあと思って、言葉もなく下を向いたら、折りたたみの小さなちゃぶ台しかないお部屋なんですけれども、そのテーブルの下から彼はこう手を出して、小指を差し出している。指切りしようっていう、言葉で約束します、守りますって言うのではなくて指を出していたので、また、私は力一杯「そう、これから色々あるけど一緒に少しずつ変わっていく、絶対変われると思うから。」と言いました。それで、お母さんがその様子を見ていて、涙をこぼしながら「今の暮らしはちょうど、生活保護で一杯一杯で何もゆとりがないけれど、子ども達がいつか将来ちゃんともっと大人になった時にお金がいると思って家計簿をつけているけど、見てちょうだい。」と渡されました。他人の家の家計簿見ませんって言ったのですけれど、本当にちゃんとつけてあって、「この人実はやっぱり、力がないわけじゃない」と感じました。もう一つびっくりしたのは、家族四人、都内の銀行に一つ一つ違う銀行に口座を開いてあり、毎月一人 10 円とか２０円とかちょっとづつ積んであるのです。私は「ああ、こうなんだ。こんな人達と言われていたけれど、なんか持てる力がバラバラだったんだなあ」と思いました。

それで、学校に伺って、A 君のこと少しサポーティブに見て頂きたい、と受け持ちの先生にお話しに上がりましたら、すごく荒れている学校で、その辺の壁とかも穴が空いていてすごいのです。受け持ちの先生は美術の先生で、他の教室は作品が破られたり、ただ順番に貼ってあるというのに、その先生はこの子どもの作品を色とか形で考えて壁に貼っていらっしゃる。さすが美的センスのある先生だなと見てすぐ思いました。先生に「こういう子どもなんで私も思ってもみない事だけれど、直接担当する事になり、なんとか普通学級で今の状態でもっと良い形に伸びていってもらうように…」、というような事をお願いしましたら、「ご覧のようにこんな大変なのに、なんで私がまた、そういう生徒の受持なのですか？」とおっしゃたので、「いや、分かります。あちこち穴があいていて一歩中へ入ったら大変な様子と拝見して分かりました。でもその中で先生のクラスのお

部屋の飾り付けは、なかなかセンスが良くて、さすが先生はやっぱり美術の先生で、他とは違ってらっしゃいますね」と言ったらにんまり笑って、「お分かりですか？」

それから何かオーバーだなと思いながら絵の話等、話しているうちに機嫌が良くなられて、「まあ、しょうがない。どこまでやれるか分かりませんけど。」と言われて、私は「この子は勉強に自信を失っているので、美術の先生は美術の材料を整理するお部屋を持っていらっしゃるので、そこの片付けとかお手伝いをして頂くと本当に自分は役に立たない、人から馬鹿にされてきたと思っているけれど、それできっと変わっていくと思います。」と申しましたら「分かりました。」とおっしゃって下さいました。

お母さんへの関わりは、始めは私、お母さんにお料理を一緒にやり方を教えていました。最初は見て見ぬふりをしてらした神父様の奥様が「あなたがそこまでされるのはお忙しいでしょう、私が教えます」と言って手伝ってくれるようになってくださり、子ども達の学力が遅れているところは大学院生にボランティアの家庭教師をしてもらう事になりました。夕食の後、小さいちゃぶ台に兄弟が大学院生から勉強を習っていると、お父さんもそこで辞書を引きながらノートをつけ、わからない事は院生に習うようになりました。お母さんも料理の本を見て、少しずつレパートリーを増やす、と言う風になっていかれました。

そうこうしておりますうちに、信者の方々が少しでもあの人達が人の前に出て役に立つと言う経験ができればいいと思うと言うことで、日曜日に結婚式があるわけですけれども、その式場を整えるような役を頼んで下さるようになり、それで僅かですけど収入が増えるようになりました。それから、信者の子どもさん達は日曜学校があったのですけれど、この兄弟はなるべく目立たない様にどこかにと言われてました。それが、「同じここに居る子どもだもの。日曜学校に出てらっしゃい」と言われて、段々と受け止められる様になっていきました。その様なことをしております内にA君は中学3年卒業時には、成績はクラスで中の下位、それから英語は4が付くようになりました。

それから、最初に面接したときのことですが、最後に「半分希望がわき半分心配です。」と言われ、その時にパッとお母さんが手帳を開かれ、「見て下さい。これは私達のたった一人の知り合いです。」と。そこには施設を出るときに担当だった、もう70代後半になられたF先生お一人の住所と名前が書いてありました。「一人っきりなんです。ここに先生の住所と電話を書いて下さい。」

心理療法とかカウンセリングのテキストにはそんな事は知らせない、とありますけど、人としでどうでしょうか？私は自分の住所と電話をお教えしましたが、実はこの後しょっちゅうお母さんは電話されてきて、その都度色々お答えしていた、という事がありました。

A君が中学を卒業する時に、6畳に四人がいるのは無理なので、あちこち住まいを探しました。その中、電線の碍子を作っている中小企業の社長さんが、そういう事情のある家族であれば、子どもが一生懸命中学の間努力したのであれば定時制高校に通いながらうちで働けば一人前になれる、と雇用して下さいました。この弟さんも同じ所に勤めて、その後一人前の社会人になったのですけれども、こういう本当に自分達家族が家族として結び合って世の中に足場を得ていくという家族を大事にしていた人達からすると、A君が就職の為に、その会社の寮に住み込む事は大変な淋しい出来事だったのですね。偉いなあと思ったのは、電話をかけるとお金がかかるので、色々廃材を寄せ集めて、無線機を作ってそれで、お父さんやお母さんに「ツーツー」を教えて、簡単な「元気？」「ご飯食べた？」「風邪に気を付けて」とか毎日、無

線で連絡をして電話代を使わないで、でも気持ちが繋がるようにと工夫していたのです。

お父さんはバイクの免許を取られ、古いバイクを買って、自分達は新婚旅行も遊びも何も出来なかった、青春を取り戻そうと 50 歳近くなってから、お母さんをバイクに乗せて出かけるようになりました。旅館ではお金がかかるからといって寝袋を持って湘南の海で寝て、と程随分明るくなられました。そしてもっと驚いた事は、彼らが唯一頼って心の拠り所としていたＦ先生が亡くなられたのですけれど、Ｆ先生の奥様はお子様がいらっしゃらなくて４畳半一間暮らしの方でいらっしゃいました。そのＦ先生のお墓を、この両親はなけなしの貯金から出して小さなお墓を建てたんですね。そして雑司が谷の無縁墓地に行って、お父さんのお母さんも路上で亡くなった方なので東京都の無縁墓地に埋葬されたのですけれど、都の埋葬事務所に行ってお骨を分けてもらわれて、一番小さな神棚を買われて、部屋の壁に神棚を置き神様とこの無縁仏の骨を二つか三つ置いてそれを拝むようになりました。

やがてある時、笑い声で明るく電話をされてきて「随分今まで、村瀬先生に電話をしました、でもこの頃はこういう時は村瀬先生はなんて言うんだろうと二人で相談すると、だいたい先生が思いつくような事は考えられるようになりました。だからもう先生には電話をしません」と言ってカラカラと笑い声が聞こえたというような次第でございます。

でも、これは私が一人でした事ということではなくて、割愛いたしましたけど、このお母さんは学校に服が粗末だから保護者会にも行けないと言われて、首飾りを一つ差し上げたんですけれども、服はと思っていたら同僚が自分の素敵なワンピースやスーツを持ってきてくれるとか、色々な人が助けてくれました。それでこの両親はたった一人の、そして人間として基本が身についていない自分と思っていたのが、今からでも少しずつ学ぶ、それから他人だけど皆が少しずつ見守ってくれるという形でこういう風になっていったのです。私は、何と申しましょうか‥冒頭でも申しましたように、あの本当に小さな事でもそれを一つ一つすくい上げて、そしてそれを分かち合って支えていく事で、物事は道が開けていくのではないか、私は子育てを考える、家族の再生を考えるというのはこういう所から始まるように思います。

Lecture Text
Childhood as food for the mind

MURASE, Kayoko
Hokusho University